

志摩の海、消えゆく大漁旗 石原義剛

どの漁村も元気だった頃、正月の漁港には、色彩豊かで縁起のいい絵の大漁旗が翻って、晴れやかで賑やかだったものだ。だが、今年の元旦、志摩の海は、北風は強く快晴だったが、どの漁港にも大漁旗は消えて、静かで寂しかった。

30年ほど前までは、漁船は有りったけの大漁旗を飾って、正月の漁港を華やかに祝ったものだ。港には漁船が船腹をぶつけあうほどに舳っていた。帆柱立ての下に、船霊（ふなだま）さんへあげる松竹櫛と洗い米と鱈を盛ったワラ筒の「つぼき」が飾ってあったものだ。

正月だけでなく漁港から船数が減り、大漁旗がどんどん消えた。

港から大漁旗が消えたのはなぜか。

新造船の船下ろしがあると、満艦飾の大漁旗のもと、村中の人が集まって餅まきが行なわれた。漁船が木造から腐らないFRPに代わって、そうそう新造する船がなり、大漁旗を贈り物にする祝い事がなくなった。そればかりではない。漁師の気持ちが萎えはじめた。

沖へ出ても漁は少ない。獲れても安い。

息子たちは漁師を継がないから、もういいや、と海神に願う気持ちを失いかけている。大漁旗を掲げて大漁を祈る気持ちさえ捨ててしまったのだろうか。

最近、三重でも有数の漁港だった尾鷲でただ一軒、最後まで頑張ってきた大漁旗の染屋「万助屋」が店をたたむと聞いた。三代目の彼は90歳近くなった上、片目が見えなくなったという。弟子をとらず後継者はいない。注文もない。

大漁旗は尾鷲では「フライキ」という。「わしはな、英語のフラッグから来とると思っとたら、『福来旗』という人がいて、確かに大漁にふさわしいんでこれや思う」

もう魚群の群来に沸き『福来旗』が漁港に溢れる日は来ないのだろうか。